



青少年赤十字

J R C ふくしま

編集発行

青少年赤十字
福島県指導者協議会
日本赤十字社福島県支部
〒960-1197
福島市永井川字北原田17
TEL024(545)7998

2012年赤十字標語



人間を救うのは、人間だ。

青少年赤十字で

試験を乗り越える力を養おう



日本赤十字社福島県支部

事務局長 穴沢 正行



青少年赤十字指導者協議会ははじめ、賛助奉仕団、各学校の教師の皆様には、赤十字精神への深いご理解の下、日頃から青少年赤十字活動につきましても多大なるご支援とご協力をいただき、厚く御礼を申し上げます。

青少年赤十字において、本県は、学校加盟率でも、活動のレベルの高さにおいても全国屈指の模範県であります。私は、昨年七月に本職に就任して以来まだ日は浅いのですが、青少年赤十字関係の会合には数多く出席させていただき、参加者の熱意にはいつも感服いたしております。他県との会議でも「なぜ、福島県ではあんなに青少年赤十字が

活発なのか」という質問を受けることが多いのですが、私は、いつも「学校当局の理解もあるが、やはり指導者協議会や賛助奉仕団の熱心な取り組みにより、伝統が代々受け継がれていることが大きいのではないか」と答えております。改めて、これまでの関係者のご尽力に敬意と感謝を申し上げます。

現在、福島県は一昨年の大震災、原発事故による試験の只中にあります。特に子供たちに大きなしわ寄せがあるものと心が痛みます。大人には原発立地の責任があります。子供には全く責任がありません。にもかかわらず、今は元気を装いながらも将来の

健康被害や差別を密かに怖れている子供たちは少なくないと思いますし、否応無く廃炉までの長い時間、事故炉とつきあい、復興の重荷も背負わされることとなります。

余りにも重い現実には大人はなかなか立ち上がれない中で、今年度実施された「青少年赤十字 詩・一〇〇文字提案」の応募作品には、優秀作品のみならず応募作品の全てといってよいくらい、子供たちの強い気持ち、この大災害から人間にとって大事なものを感じ取り、未来に向かって力強く歩み出そうという前向きな気持ちがあふれておりました。「健康」や「安全」の大切さや「奉仕」の尊さ、「気づき、考え、実行する」という基本を、この大災害の中で身をもって、あるいは報道で、あるいは先生や友達から学び取った子供たちが少なくないという事実は私たちに何よりの希望であります。加えて、この機会に強調させていただきたいことは「国

際理解・親善」の重要性です。私も赤十字では現在、被災者の皆様への「生活家電の寄贈」や「健康づくり活動」、「スクールバスや仮設体育館等の教育環境の整備」、「子供の屋内遊び場の提供」、「各種復興イベント」など従来の赤十字活動の枠を越えて、様々な支援活動に取り組んでおります。これらの資金は総て、一〇〇を超える国や地域からの「海外救援金」で賄われておりまして、感謝の極みであります。これは今までに我が国

が海外支援や援助に積極的に関わってきたことへの返礼の意味も込められており、いかに日頃からの「人道支援」や「国際親善」が大切かを知らしめてくれます。今、理不尽な困難に直面している福島県の子供たちには、積極的なJRC活動を通して、こうした基本目標をしっかりと捕らえ、「試験は宝」の強い気持ちで、明るい未来を切り拓いていってほしいと願わずにはおれません。

第三十六回 青少年赤十字

福島県指導者研修会並びに

学校公開を終えて

震災を乗り越えて



東白川地区青少年赤十字指導者協議会長
矢祭町立石井小学校長

高崎 康行

第三十六回青少年赤十字福島県指導者研修会並びに学校公開は、十月五日（金）に、矢祭町立矢祭中学校を会場に開催されました。本来ならば昨年度行われる

予定でしたが、震災の影響で、公開が一年延びました。こんな時だからこそ赤十字の精神が、福島の復興の大きな力になるという状況でした。その間に、前会長で前実行委

員長の校長先生、会場校の校長先生が転任されて、力不足の私が会長を引き継ぐ形になり、責任の重さを痛感しました。

学校公開当日は、受付と並行して小学生の一輪車乗り、中学生の朝の活動と日常の子ども達の公開に始まり、小学校・中学校の全学級の授業公開、小・中学生の昔遊びでの交流活動、中学生の太鼓の発表と盛り沢山で、児童生徒の様子を存分に参観していただくことができました。

特に、「気づき、考え、実行する主体的で思いやりのある子どもの育成」を研究主題として公開された授業では、命の大切さや、ボランティアへの意識の高まりを感じる事ができました。また、交流活動では、中学生が小学生をいたわり、違和感なく交流している姿があり、合同での登録式をはじめ、これまでの青少年赤十字活動を通して、交流を続けてきた成果を見ることができました。更に、東白川地区の各小・中学校の模造紙による発表では、震災の影響で、指定を受けてから三年間となった取り組み等を見ていただくことができました。

午後からの開会行事では、

国見町立東北中学校の生徒会長、赤井畑誼君が全国赤十字大会で「東日本大震災後の取り組み―自分たちにできること―」の演題で発表した様子をDVDで紹介し、全体指導では、県の義務教育課指導主事、菊池淳一様にご指導をいただきました。記念講演では、文部科学省初等中等局教育課程課教科調査官の杉田洋先生が、「子どもが変わる」学校での実践活動を紹介してくださり、参加者からのアンケートにも感動の言葉を多数いただくことができました。最後にになりましたが、大きな成果をあげることができたのは、二百八十名を超えた参加者の皆様、ご指導いただきました、日本赤十字福島県支部、県南地区青少年赤十字賛助奉仕団、豚汁を提供くださった、矢祭町の日本赤十字奉仕団、多くの校長先生が、実行委員として活躍してくださった、東白川郡校長協議会の皆様はじめ、ご協力いただきました全ての皆様のお陰です。重ねて御礼と感謝を申し上げます。

研究を通して

矢祭町立下関河内小学校長

金子 洋一



青少年赤十字の精神を生かし、「気づき、

考え、実行する主体的で思いやりのある子どもの育成」を研究テーマに三年間取り組んできました。

子どもたちが、日々の生活の中で、気付くこと、考えること、そして自己決定により行動を起こすことを繰り返しながら、より良い成長を図っていくために、教育活動を見直したり具体的な指導法を工夫したりして、その具体化に努めてきました。

その集大成となる研究公開では、本校の「健康教育」の特色でもある一輪車の演技披露、「国際理解・親善」「健康・安全」「奉仕」の三領域を踏まえた公開授業、そして小・中学生の「昔遊び」を通しての交流活動が行われました。分科会では多くの参加者の皆様から、貴重なご意見やご助言をいただき、盛会に終える

ことができましたことに深く感謝申し上げます。さらに、公開を終えた子どもたちが、「緊張した」と言いながらも満足感、充実感で笑顔にあふれていたこと、教職員も達成感でいっぱいであったことが何よりの喜びといえます。

この研究実践を通して、授業の中で「気づき」「考え」「実行する」姿を実現するための手立てとして、問題解決的な学習過程の工夫が行われてきたことは、教職員の指導力向上に大きな成果となっていました。また、日常活動で、「こんなふうになりたい」「こうやってみたいかどうか」と考えて取り組む姿や、様々な場面です自主的にボランティア活動をする姿、上級生が下級生を優しく面倒を見る姿など、子どもたちの着実な心の成長を実感しています。

東日本大震災で一年延長の研究となりましたが、福島県の復興に向けて、思いやりの心や人と人との絆を大切にす教育が求められている現在、この青少年赤十字の活動は時宜を得た活動であると自負しています。

これまで培ってきた実践や態度をさらに発展させていけ

るよう、これからも全校生徒と全職員が丸となって取り組んでいきたいと思っています。

進化し続ける子どもを目指して

矢祭町立下関河内小学校教諭

森合 耕一

「先生、今日はお菓子の袋が落ちていました。」

今ではすっかり当たり前の光景になりましたが、本校では、児童が登校中に見つけたごみを拾って学校に届けてくれています。

本校は平成二十二年度からの三年間、青少年赤十字研究推進校の指定を受け「気づき、考え、実行する 主体的で思いやりのある子どもの育成」青少年赤十字の精神を生かした日常活動をととして「」を主題に、教育活動全体を通して研究と実践に取り組んできました。その取り組みのきっかけの一つになったものが、子どもたちの普段から行うボランティア活動でした。以前の本校のボランティア

活動といえば、全校生で行うクリーン活動といった、いわ

ゆる行事的なものはありませんが、日常的な活動というところ、五・六年生で行う各教室のごみ集めや校舎周辺の掃き掃除といったものでした。しかし、それは「決められたものだからやる。」といった義務感が強く、自主的な行動ではありませんでした。こういった子どもたちの考え方を

変えていきたいと言う気持ちから、青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」といった姿勢を意識して研究に取り組んだところ、五・六年生は代が変わる度に、先輩たちが実践してきたボランティア活動を引き継ぎながらも、さらに良いボランティア活動にしていこうと自分達から話し合いを重ねる姿が見られるようになってきました。

その結果、ボランティア活動とは、特別なことをするのではなく、個々の気持ちが大切であるということにたどり着きました。そんな子供たちの気づきが考えて実行するボランティアの活動の原動力となり、今ではその姿勢は全校生に広がっています。

子どもたちは「気づかせるためのきっかけ」の指導があ

れば、常に進化するものだと考えます。そのためにも私たちは今後も、青少年赤十字を生かしながら「気づき、考え、実行する 主体的で思いやりのある子ども」の育成の実現により強い気持ちを持って取り組んでいきたいと思っています。

自分達にできること

矢祭町立下関河内小学校

六年 近藤 葵

私は J R C 活動を通してボランティアは「やらなきゃいけないもの。」から「自分からやりたいもの。」に変わりました。

私は一学期、学校の J R C 活動を計画し、進めて行く運営委員会の委員長になりました。初めは、「三十一人しかない私たちに何ができるんだろう。」と思っていました。でも、みんなで『自分たちができること』をテーマに話し合い、協力し合ってやってくうちに不安はなくなりまし



矢祭町立矢祭中学校 校長

阿久津光俊

平成二十三年十月に本校を会場に開催予定の第三十六

「気づき・考え・実行する」

と」だったからです。私が登校するときに、道ばたにゴミが落ちていると登校班のみんなでゴミ拾いをしながら登校しています。初めは気がついた人だけやっていましたが、いつの間にかみんなに広まり、進んで行っています。校内では、五・六年生が協力して、なかなか掃除ができない水道をきれいにしたり、各教室のゴミを集めたりしています。

『自分たちにできること』で町や学校みんなが喜んでくれたり、気持ちがよくなってくるのを見て「やってよかった」と思いました。だからこれからも進んで「自分たちにできること」を続けて行こうと思います。

回研究公開が、東日本大震災等の影響でやむを得ず延期されましたが、お陰様をもちまして平成二十四年十月五日(金)に二百五十名を超える参加者をお迎えし、盛大に開催することができました。三年間に渡りご指導ご支援を賜りました日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会をはじめ、多くの関係者の皆様に心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、本校では、共通研究主題「気づき、考え、実行する 主体的で思いやりのある子ども」の育成・青少年赤十字の精神を生かした日常の活動を通して『の』のもと、様々な取り組みを継続してきま

した。三領域の一つである「国際理解・親善」領域では、矢祭町の絶大な支援をいただきながら継続実施しているオーストラリアへの海外修学旅行などから、国際的な視野をもった生徒の育成に努めています。

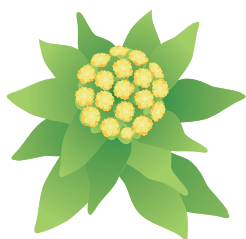
また、「奉仕」の領域では、町の社会福祉協議会などと連携し、サマーショートボランティアスクールをはじめ、地域ボランティア活動を全校あ

げて取り組んでいます。

さらに「健康・安全」の領域では、朝の運動に積極的に取り組むとともに、思春期保健講座などを通して、命の大切さ・生命尊重についての学びを推進しています。

これらは、公開に向けて新たにに取り組んだものではなく、日頃の教育活動と青少年赤十字の精神とを関連させ、結びつけたものです。学校経営・運営ビジョンに基づいて教育活動の充実を図っていることに他なりません。

今後も、全ての教育活動において、生徒一人一人の「がんばり」や「良さ」を認め、称賛し、「自己肯定感」や「自己有用感」をさらに高めていくことが「気づき、考え、実行する、主体的で思いやりのある子ども」の育成に直結するものと考え、学校全体でベクトルの向きを揃え、日常の教育活動の充実に向けて取り組んでいきたいと考えています。



J R C 活動から得たもの

矢祭町立矢祭中学校 教諭

久保木 学

本校は中通り最南端に位置し、周囲を緑豊かな山々に囲まれた学校です。学校の雰囲気は明るく、穏和で素直な生徒がほとんどです。

その一方で、様々な活動に際して受け身がちになりやすい課題もありました。決められたこと・指示されたことにはしっかりと取り組むことができませんが、それ以外の時と場に応じて、よりよい方法に気づいたり、工夫したりといった自ら進んで活動する力が弱かったのです。

そこで、「気づき、考え、実行する」主体的で思いやりのある子どもの育成」を研究主題とし、青少年赤十字活動を柱にし、平成二十二年度から研究を進めてきました。生徒の主体的な姿の実現に指導の視点をおき、全教育活動の中で指導を進めてきました。

現在では、三年生を中心に始業前に校舎内外のゴミ拾いや掃き掃除に自分から取り組んでいます。また、多くの生徒が始業前にランニングなど

の「朝の運動」に取り組んでいます。

その結果、奉仕の心が芽生えたり、体力が向上したりするだけでなく「自分で決めたことを最後までやり通す強い心」も育っています。

また、下関河内小と連携し、J R C 登録式、クリーンアップ作戦、ミニ運動会、昔あそびを実施しました。これらは本校の J R C 委員会が中心となり企画立案し、小学校と連絡調整や会の運営を担いました。教師は生徒の相談役、サポート役として見守る姿勢を貫きました。失敗や遠回りが多く、時間はかかりましたが、より生徒はいきいきと活動に取り組み、先日の公開でも意欲的な姿を見せてくれました。

我々教師も、生徒と活動を共有しながら、一人一人の「がんばり」や「良さ」を認め、賞賛し、「自己肯定感」や「自己有用感」を高めることの重要性を再認識させられました。

研究指定校での活動は本年度までですが、この研究で根付いた成果が、日々の生活のなかで継続し、今後より深化した活動に繋がっていくと考えます。

青少年赤十字作品募集

「詩」・「100文字提案」



青少年赤十字の活性化と意識の高揚を図るため、県支部事業として平成十八年度から引き続いて児童生徒の作品募集をしています。特に今年度は、海外の赤十字から寄せられた救援金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施し、最優秀賞に選ばれた作品の中から「日本赤十字社社長賞」「日本赤十字社福島県支部長賞」が設定され選考されました。今年は七十六校から、詩「いのちの詩」・「愛の詩」に千三百点、「100文字提案」あたたい言葉のプレゼント」に九百七十六点、「わたしのボランティア」に七百三十五点、「100さんのすばらしいところ」に千四百九十二点、「東日本大震災でわたしが『気づき』『考え』『実行』したこと、しようとしたこと」に百九十五点、その他に四十一人、総計では四千七百三十九点の応募をいただきました。

作品審査は十月十五日(月)

に日赤福島県支部において青少年赤十字賛助奉仕団の小島喜一先生を審査委員長とした二十三人の審査委員により、時間をかけ慎重に審査を行われました。その結果日本赤十字社社長賞一点、日本赤十字社福島県支部長賞五点、最優秀三十一人、優秀百七点、佳作二百十四点、入選三百六十九点選ばれました。

社長賞・支部長賞を含む最優秀の表彰式は十一月二十九日(木)に福島県支部で受賞者とその保護者、多数の審査員が出席して行われ、穴沢正行事務局長から受賞者に賞状と盾が手渡された。その後参加された受賞者による作品の読み上げが行われました。

今年も積極的にご応募いただいた学校、適切なご指導をいただいた先生方、たくさん応募してくれた児童生徒のみなさんに感謝とお礼を申し上げます。

詩「いのちの詩」「愛の詩」から社長賞と支部長賞の三人の方々に受賞の感想をいただきました。

叫び

須賀川市立小塩江中学校

二年 竹内 梢恵



東日本大震災一周忌。天皇、皇后陛下が黙禱なさっている時、もちろん私も手を合わせました。夕方、その報道があった。被災地で人々が手を合わせ涙にむせぶ様子、重い沈黙の一分間。私が驚いたのはフランスの人がわざわざ日本時間に合わせて祈りを捧げる姿だった。有難いと思った。一方、落胆した一部の東京のあり様。今日が何もなかった日のように人々は交差点を歩いていた。私はとても苛立った。なぜ日本人が。

この詩はこの時の心の内を書いた詩です。まだ震災は終わっていません。皆さんに共感してもらえて嬉しいと思いました。ありがとうございます。

した。

「いのちの詩・愛の詩」

日本赤十字社 社長賞

忘れるな

あの一瞬のでき事を

忘れるな

自然に對してなすすべがなかった事を

忘れるな

帰りたいと思う故郷を

忘れるな

命を張って人々を助けた英雄を

思い出せ

日本人の誇り高き美しさを

家族の大切さ

天栄村立大里小学校

六年 金子 真唯



あの大地震で家がこわれ、家の前で土砂くずれが起こりました。でも、家族全員が無事でいられたことに、みんな感謝しました。学校へ避難したとき、大人の人たちが

「食料と水は子どもとお年寄りが優先だ。」と言った言葉もすごく心に響きました。地震はこわかったけど、人の親切さ、家族の大切さを改めて実感しました。そのときの家族への思いを詩に書きました。

福島県支部長賞

家の前の山がくずれた山の土は

田んぼまできた

もう少してばくの家も

うまるところだった

信じられない

光景を目にして

家族の無事を感謝した

こわれかけた家の中

みんなの笑顔があった

詩・一〇〇文字提案の作品は

学芸松韻学園 福島高等学校

二年 安斎 秀喜



私は、東日本大震災を受けて感じたことを詩にしました。

私は、震災のニュースや新聞を見て、何かをしたいと思いながらも何をすればいいかわかりませんでした。高校に入ってJRC部の存在を知り、自分にもできることがあればと入部を決めました。私は、活動を通して私は様々な人と交流したくさんの笑顔に出会いました。また、その笑顔に自分も元気づけられているのだと思います。

福島県支部長賞

悔しかった。

震災があったのに何もできずにいるちっぽけな自分が怖かった。

急に変わった周りの視線が嬉しかった。

「応援してるよ」って言ってもらえることが。

「ありがとう」とたくさんの笑顔に出会えたことが。



平成二四年度青少年赤十字 国際交流事業Mt. Fuji

2012



日本赤十字社は青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」の具体的な活動の機会として海外と日本の青少年赤十字メンバーが直接交流できる国際交流事業を行っています。昨年は震災の関係もあり行われませんでした。今年度は十一月二十三日から二十六日までの四日間静岡県御殿場YMCA東山荘にアジア二十一カ国・地域から海外メンバー、職員の方が四十六名、日本全国各地三十六道府県から高校生七十五名、指導スタッフ十五名、語学奉仕ボランティア三十三名、ユースボランティア十八名、看護師一名、講師一名、日本赤十字社職員八名により開催されました。福島県の交流事業の参加者については従来の二名の所、被災県はもう二名参加ができ四名、また指導者として二名が加わり本県から六名の参加となりました。そんな中で福島県メンバー四名は被災県、原発問題がまだ収束していない福島県の現

状を国内・海外のメンバーにわかってもらうための活動を行うことに決め、事前準備を行いました。県大会でプレ発表を行い、問題点や修正点を見つけ改善しました。そんな四人を応援しようと他のメンバーはグリーティングカードを交流事業参加者全員に届けようと日本語と英語で作り、四名にたくしました。

Mt. Fuji 2012に参加して

福島県立福島高等学校

一年 日下 輔

Mt. Fuji 2012の自分の最大の任務は「福島県の現状を全国に、世界に伝えること」だった。

二日目の活動紹介の際、福島のブースに日の丸の旗が立ててあり、日本代表も兼ねることを知った。緊張したが自分を含めた県のメンバー四人で、福島のブースの中で様々なものを展示した。震災時の原子力発電所の写真や線量マップ、学校の敷地内にあるリアルタイム線量計などの写真を手懸念に説明を行った。たくさんの方の日本や海外メンバーが訪れ、熱心に話を聞

いてくれたことに感銘を受けた。

またワールドワークやグループディスカッションなどの活動を通し、グループ内の海外メンバーと交流し、各国の現状を知ることができた。今回の国際交流でコミュニケーション力がつき、ひとり大きくなったような気がする。得たものを糧にJRC活動に励み、福島を元気づけた。

ご指導、ご支援助け下さった学校の先生や赤十字のスタッフの方々に心から感謝したい。

『Mt. Fuji 2012で学んだこと』

福島県立白河実業高等学校

一年 鯉沼 由奈

私はMt. Fujiに福島県代表として参加し、アジアの国々のJRCメンバーと『人間の尊厳』について一緒に考えました。私の班の編成は、インド・香港・カンボジア・日本です。四日間を通してグループワーク、フィールドワーク、グループディスカッションで海外メンバー国の状況を知り、その解決策を考え発表しました。そんな中で私には思い浮かばなかった

国際交流事業に 参加して

福島成蹊高等学校

二年 服部 麗

私は、国際交流事業 Mt. Fuji 2012 に参加して視野が広がりました。今年度のテーマは「人間の尊厳」でした。講演では子ども

アイディアや意見が多くあり、驚きの連続でした。最終的に『人間の尊厳』を守る為に私達は、「相手が大変な状況に置かれている場合に、私達が奉仕することによって、相手の尊厳が守られ、私達の尊厳も守られる」という答えに辿り着きました。

また日本代表として福島県が活動紹介を行い、原発など福島県の現状を伝えました。熱心に話を聞いてくれ、心配などをしていたきとても心が温まりました。

私はこれから相手や自分の尊厳を守って行く為に学校でのボランティアや献血にも積極的に参加していきます。最後に、Mt. Fuji に参加する私を支えて下さった先生方、本当にありがとうございました。大変貴重な経験をすることができました。

も兵士、女性への暴行、貧困など目を背けたくなるような写真がうつし出されましたがこれが現実なのだと思え止めました。グループディスカッションでは海外メンバーと現代の問題である HIV (エイズ) について話し合いました。町中にポスターが貼ってあるカンボジア、文化の背景を重視して対策を考える必要があるパキスタン、カンパーンや授業で学ぶ日本・ロシアなど各国間では危機感に対する差があると強く感じました。最後に私たちが求められる行動を一人ひとりが考え、まとめました。

各国活動報告では、日本を代表して昨年の震災の復興のために実践することを発表しました。ブースには震災直後の津波と原発の写真集や新聞記事などを置き、ありのままの福島を報告することができました。また、福島へのメッセージを書いていただき、沢山の応援に元気をもらいました。

私は同世代の各国の J R C メンバーと意見を共有出来たことに感謝しています。ここで経験したことを福島のメンバーに伝えて行きます。

平成24年度国際交流事業 MT.Fuji 2012 プログラム

	11月23日(金)	11月24日(土)	11月25日(日)	11月26日(月)
7:00		起床	起床	起床
8:30		朝食	朝食	朝食
9:30		フィールドワーク (含: 昼食)		閉会式 振り返り
10:30			グループディスカッション 3 (含昼食)	10:30 海外メンバー出発 10:40 日本メンバー出発
12:30		結果発表 記念写真撮影		
13:15 13:30 14:00	受付			
15:30		グループワーク	グループディスカッション の発表	
16:00 16:30 17:00	開会式 オリエンテーション		まとめ	
18:00	アイス・ブレイキング	グループディスカッション 2	夕食	
18:30	夕食	夕食		
19:30 20:00 20:45	グループディスカッション 1	青少年赤十字活動紹介	文化交流	
21:00	健康チェック・連絡タイム	健康チェック・連絡タイム		
21:30			健康チェック・連絡タイム	
22:00	入浴・就寝準備	入浴・就寝準備	入浴・就寝準備	
22:30	消灯	消灯	消灯	

国際交流事業に 参加して

学法松韻学園 福島高等学校

二年 安斎 秀喜

私は、Mt・FUJII 2012に参加して多くのことを学ぶことができました。

最初は、海外メンバーとの活動がうまくいくのか不安がありました。が、せっかくの機会なので勇気を持って積極的に海外メンバーに話しかけるようにしました。英語を使ってコミュニケーションが取れたときはとてもうれしかったです。自信にもなりました。

グループワークは人間の尊厳、環境問題について話し合いました。話し合いは、様々な意見が出されとても内容の濃い白熱したものになりました。私にはテーマが難しく、どうしてよいか分からなくなったりときもあったのですが、海外メンバーは、スラスラと自分の意見を発表し、日ごろの意識の高さの違いを見せられたような気がして少し悔しかったです。フィールドワークや文化交流もテーマソングを歌うのもとても楽しかったです。また、再会する機会があれば海外メンバーと

は通訳を交えず、自分の力だけでコミュニケーションを取れるようになってみたいです。

Mt・Fuji
の四日間

福島県立福島東高校 教諭

松本 仁子

アジア太平洋地域のJRC/RCYメンバーが集い、四日間生活をともにし、ディスカッションを重ねるこのプログラムは、刺激的で充実し、人々の理想と優しさを知る機会となった。

特に今回は東日本大震災の被災地からの参加ということで、福島の果たす役割も課せられたが、福島からの参加生



徒による「各国活動紹介」での内容は素晴らしく、他国の高校生を心動かす、これからの長い力となることを確信した。

さらに指導スタッフとして参加する全国の先生方との交流では、学校で抱える様々な問題を共有できたほか、放射能汚染にゆれる福島県の学校の様子を伝え、多くのはげましの言葉をいただいた。

そして前回から加わった「人間の尊厳」を考えるセッションを通して、「行動しなければ自分の尊厳もそこなわれてしまう」という言葉から、被害者の尊厳を守ろうと行動することが自分の尊厳をも守ることであると学んだ。

このプログラムに参加させていただいたことに心から感謝し、今回の感動をこれからの指導にしっかりと還元させたいと心に誓う。

YOUTH ON THE
MOVE!
JRC/RCY
International Meeting
Mt.Fuji 2012
参加しよ

福島県立白河実業高等学校教諭

シエルパ愛子

静岡県の御殿場YMCA東

山荘にて青少年赤十字国際交流集会Mt・Fuji 2012の開会式が行われました。海外メンバーが各国・地域の代表として国旗を掲げ入場し、彼らの表情は誇らしげで、本当に眩しい光景でした。一方で、私達福島県メンバーは、東日本大震災後の福島県の現状を伝えよう、伝えなければならぬ、という使命を再確認した開会式でした。その後、国内外のメンバーが十五の班に分かれ、英語での自己紹介、グループディスカッションやその発表、グループワークでのポスター作り、フィールドワーク、文化交流など、自らコミュニケーションを取り、お互いを思いやりながらの活動をした。そしてその中心にあったのは「人間の尊厳とは？」という問いでした。生まれ育った環境や価値観など違いを持ちながら、しかし「人間の尊厳を守る為に『私達』青少年は何ができるのか」を話し合い、意見がぶつかり合い、それでも互いを分かろうとする、何とか理解し合おうとする姿は感動的です。すでに班そのものが地球の縮図で、その中で懸命に生きる姿がありました。二日目の青少年赤十字活動紹介では準備した『ふ

るさを守る・福島県JRCのこれからの活動』を日本のブースで紹介しました。懸命に各国・各県の訪問者に「福島」の今を伝え続ける「被災者支援を継続する」「自分達の力で福島を復興させる」などを伝えました。そして県大会で県内のメンバーで作成した「世界中からの支援をありがとうございました！福島県は頑張っています」というグリーティングカードを一人一人に手渡ししてきました。まだまだ書ききれませんがこのように素晴らしい集いを企画して頂き参加出来たことは宝だと思っています。企画運営して下さった方々、参加を支えて下さった先生方、一緒に活動した生徒の皆さんに感謝申し上げます。後は…Doing More, Doing Better!

あとがき



第四十九号は昨年度行われなかった学校公開、国際交流事業と「詩」「○○文字提案」と多くの内容となりました。

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました方々、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。